

十七、聖なる山

岳城 たけじょう

若杉山から西になだれて篠栗町の南を限る山の稜線。昔から岳城と呼ばれてきた山はそのほぼ中ほどにあつて、そこに登ると、表糟屋から博多湾、さらに玄界灘にいたる大展望が開けます。

久山町の猪野には遠見岳があつて、ここからは山田・久原だけでなく宗像郡までも見渡すことができますし、宇美町の障子岳(現名前障子・後障子)も同じような広大な展望を持っています。

はるかな昔、村々の産土神は春になると里にくだつてきて田畑と村人を守り、秋には山に戻つていつて遠くから村を見守ると信じられていた時代には、村人たちは秋の取り入れがすむと、神馬を仕立て、それに産土神を乗せて、見晴らしのいい山に送つていつて、そこで盛んな祭りを行いました。このような山は普通の山と区別して、特に〇〇岳と呼ばれた

のです。

「岳の新太郎さん」という民謡で有名な肥前の多良岳もそうで、麓の娘たちのあこがれの的となつた新太郎さんという若い美僧のイメージは、神の寄人として美しく化粧させて神馬に乗せて行つた稚児の姿がもとになつたものでしょう。(神馬は今も太宰府天満宮などでは飼われていますし、飼われない場合は、代わりに絵馬が奉納されます)

岳城はむかし、高鳥居岳と呼ばれていたかと思われます。鳥居はタオリという意味で、タオリとかタオは山の稜線の鞍部のことです(たとえば萩尾区の入り口の陣が田尾)。それが十六世紀に大内氏が筑前の守護になつて、ここに高鳥居城を築いて筑前支配の牙城としたために、城という名が加わつたのでしよう。この城があるために、篠栗は戦国時代にたびたび戦乱の巷となつて業火の渦にまきこまれましたが、それにもかかわらず岳の名が消えずに残つてきたのは、この山がやはり篠栗や須恵の村人にとつて、聖なる祭儀の山であり続けたからではないでしょうか。



左の飯焼山(岳城山)と右の展望台の間に、千畳敷と呼ばれてきた鞍部があります。